

eu-j EU-Japan Friendship Week

オリンピック特集

EU 加盟国で開催されたオリンピック

2004年5月8日(土) ~ 5月24日(月)



第210回展示

慶應義塾大学三田メディアセンター 展示委員会

< EU加盟国で開催されたオリンピック >

展示にあたって



「日・EUフレンドシップウィーク」って何？

日本とEUは国際政治経済の舞台において、共に大きな影響力を持ち、両者の間では、国家首脳レベルの外交や経済界の交流などが盛んに取り交わされています。ただし通常の単一国家とは異なり、EUは複数の加盟国を股にかけた、よろいのように堅固で複雑な組織の上に成り立っています。さらには輪番制で議長国を受け持つ制度や、多岐にわたる条約や法律の数々、また各加盟国の立場や地域委員会の存在など、EU以外の国にとってはイメージを描きづらい事も少なくはないでしょう。

駐日欧州委員会代表部（在東京）はそんな我々とEUとの橋渡しをめざし「**日・EUフレンドシップウィーク**」という企画を2001年から開催しています。期間中に開催される様々なイベントは、親しみやすい気楽なものが中心とされ、EUや欧州に対して新しい側面を発見する事ができるかもしれません。

今年も全国でイベントが行われていますが、オリンピック・イヤーにあたる2004年の企画として、慶應義塾大学は「**オリンピック特集：EU加盟国で開催されたオリンピック**」展を行います。戦争をはじめ、オリンピックには国際政治の波に翻弄された時代もありました。EUは戦後誕生した機関ではありますが、母体となった諸国で開催された様々なオリンピックのエピソードを戦前のものから振り返り、ヨーロッパへの興味が少しでも高まれば幸いです。



EU資料センター（EDC）

慶應義塾大学三田メディアセンターは、欧州委員会が指定する**EU資料センター**（European Documentation Centre = EDC）の一つとして、1982年から**EU公式資料**や各政策分野に関する**広報資料**を収集しています。EUについて調べているなど、これらの資料をご覧になりたい方は図書館4階にお越しください。

< 近代オリンピックの黎明期 >

オリンピックの復興とクーベルタン男爵

イギリスやギリシャなど、ヨーロッパ各地で萌芽していたオリンピック復興の兆しを結実させたのはフランスの教育学者クーベルタン男爵（Pierre de Coubertin, 1863-1937）です。

クーベルタンはイギリスのパブリックスクールを視察し、宗教とスポーツを重視する教育に感銘を受けて、普仏戦争に敗れ沈滞していたフランスの再建を、青少年へのスポーツの普及で果たそうと考えました。また、スポーツの国際交流による世界平和の実現に熱意を抱くようになりました。

1892年パリのソルボンヌ大学で「ルネッサンス・オリンピック」という講演を行い、オリンピック復活を提唱。94年には国際スポーツ会議でオリンピック復興を決議し、国際オリンピック委員会（IOC）を創立しました。死の2年前に行われた講演「近代オリンピズムの哲学的原理」には彼のオリンピックに抱く信念が表現されています。

クーベルタンの墓はローザンヌにあります。遺言により、心臓はオリンピアの遺跡に埋葬されています。

第1回 アテネ大会（1896年4月6日～15日）

オリンピック復興が決定したものの、経済状況の悪化と政治抗争の最中にあったギリシャの現実は厳しいものでした。開催の準備は困難を極めたのですが、王室の協力と大富豪アペロフの寄付をとりつけたことで事態は好転しました。

完成した大競技場は、直線コースが長く、コーナーが急カーブであることが特徴の古代の“スタディオン”がモデルです。そしてマラソンはギリシャの故事にちなんで Marathon から Panathenaic Stadium までの起伏にとんだ約40kmのコースで競われました。

古代オリンピックをしのばせるこの第1回大会は、地元ギリシャのスピドリン・ルイスが最終日のマラソンで優勝し、10日間の熱戦は大盛況のうちに幕を閉じました。

第2回 パリ大会（1900年5月20日～10月28日）

：万国博覧会に取り込まれたオリンピック

第2回大会は、オリンピック復興に尽力したクーベルタンに敬意を表し、彼の出身地パリで行われました。しかしフランス政府は同じ年に開催が決まっていた万国博覧会に取り込み、その付属国際競技大会として位置づけてしまったのです。そのため16競技94種目が行われた競技は、施設不備、運営も不手際な中で5ヶ月に渡り延々と続けられることとなりました。選手に授与するメダルも、オリンピック組織委員会が把握していたのは、実際にクーベルタンが関係した陸上競技のみで、これも作成が間に合わず、選手の手元に届いたのは2年後だったという始末でした。

また、プロ選手とチャンピオンの競争には賞金が出されるなど、オリンピックを普及・発展させようとしたクーベルタンの意志には反する結果となってしまいました。

第4回 ロンドン大会（1908年4月27日～10月31日）

：「参加することに意義がある」

ロンドン大会は、設備面ではメインスタジアムの建築、組織面では各国内オリンピック委員会（NOC）が整備され、将来のオリンピックの見本を示した大会であるといわれています。過去3回の大会は、個人またはクラブチームによる参加でしたが、NOCを通して参加することにより、開会式でアルファベット順の国別に、国名標と国旗を掲げて入場行進が行われるようになったのもこの大会からです。

一方で、大会中にはアメリカとイギリスのナショナリズムの対立が激化し、会期中にセントポール大聖堂で行われたミサでは、主教が「オリンピック大会で重要なことは、勝利することより、むしろ参加したということであろう」と選手を諭したというエピソードも残っています。クーベルタンがこれを引用し、演説したことから“オリンピックの理想”ともよばれるようになった「参加することに意義がある」という言葉が生まれました。

第5回 スtockホルム大会（1912年5月5日～7月22日）

オリンピック運動に深い理解を示すスウェーデン王室の協力により実現した第5回大会は、近代オリンピックの基礎を確立した大会であると評されています。特に、学生時代に陸上選手として活躍した電気技師で、組織委員会の副会長を務めたエドストロム（Ed'ström, Johannes Sigfrid, 1870-1964）が活躍し、実施競技種目の徹底した見直しとルールの整備、電気時計や写真判定器が採用された大会です。日本が陸上短距離とマラソンの2競技により初参加した大会でもあります。

しかし、オリンピックが“正しい姿”になりつつある一方で、水面下では領土・統治問題をめぐるオリンピック出場争議など、スポーツにナショナリズム・帝国主義が影を落とす時代へと確実に推移していました。

< 第一次世界大戦 ~ 第二次世界大戦のオリンピック >

1916年にドイツのベルリンで開かれるはずだった第6回オリンピックは、直前に始まった第一次世界大戦によって中止となりました。戦後、IOC会議ではベルギーのアントワープを第7回(1920年)の開催地に選びました。ヨーロッパはどこも戦争の被害を深く受けていたのですが、それまでの記録を上回る29カ国2,668名の選手が参加、23競技161種目が行われました。この大会から青、黄、黒、緑、赤の5色が配置された五輪旗が登場しました。輪は友情を象徴し、色はどの国の国旗にもこれら5色のうちの1つ以上を使用していることから世界中の国を表しています。この五輪旗のもと再スタートを果たしたオリンピックですが、大戦の影響から、ドイツ、オーストリア、トルコ、ハンガリー等は招待されませんでした。

また、この大会ではオリンピック史上最年長メダリストが誕生しています。スウェーデン代表のオスカー・スパンは、射撃のランニングディアで銀メダルを獲得。この記録は現在も破られていません。

第8回(1924年)はパリで開催されました。44カ国3,070名の選手が参加、19競技140種目が実施され、アメリカが圧倒的強さで45種目で金メダルを獲得しました。

第9回(1928年)はアムステルダム大会です。46カ国2,694名が参加。16競技119種目が実施。参加国は着実に増え、30年の歴史を積み重ねようやく充実期を迎えたといえるでしょう。

第11回(1936年)はベルリンで開催されました。49カ国から3,956名が参加。このとき政権はナチスが握り、ベルリンオリンピック大会組織委員会総裁に就任したヒトラーの号令で、史上空前の豪華な大会となりました。当時、政治的色彩に一部では批判の対象にもなった大会です。

この大会ではオリンピック史上初めての聖火リレーが行われました。記録映画が1938年のヴェネツィア映画祭で金獅子賞を獲得。日本では「前畑がんばれ!」が伝説となった前畑秀子選手が女子200メートル平泳ぎで金メダルを獲っています。

この後、第12回(1940年)が東京開催予定でしたが日中戦争、フィンランドのソ連侵攻などで中止となり、さらに、第13回はロンドンが開催地として決定したのですがヒトラーのポーランド侵攻で第二次世界大戦へ突入し、中止となってしまいました。

第二次世界大戦後

大戦終了後の第14回大会(1948年)はロンドンでの開催となりました。59カ国から4,064名が参加しましたが、日本とドイツは戦争の責任を問われ招待されませんでした。世紀のランナーといわれたザトペック(チェコスロバキア)の活躍はこの大会から始まりました。

< 第二次世界大戦以降に EU で開催されたオリンピック >

第 15 回 ヘルシンキ大会 (1952 年 7 月 19 日 ~ 8 月 3 日)

フィンランドの首都ヘルシンキは、首都とはいえ人口 40 万にも満たない小都市でしたが、交通整理に軍隊を出すなど国をあげて取り組みました。組織委員会は、メインスタジアムから 3 km ほどの地区にオリンピック選手村を設置しましたが、これまで参加を拒み続けていたソビエト連邦が本大会に参加表明すると同時に、別の選手村を要求したために、2 つの選手村が誕生することになりました。ソ連が専用の選手村を要求したのは、自由主義諸国の選手と交流するのを避けるためでもあり、この時にスポーツ界の東西対決が始まったといえます。4 年前の第 14 回ロンドン大会は、長い戦争の影響もあって記録は低調でしたが、今大会の陸上競技は 33 種目中 27 種目にわたって記録が更新されました。

第 17 回 ローマ大会 (1960 年 8 月 25 日 ~ 9 月 11 日)

“永遠の都”ローマでの開催に、組織委員会では、「現代と古代の調和」をテーマに決めました。ローマの北部にプールや体育館を新設する一方、カラカラ大浴場跡で体操、市場跡のバジリカ・デ・マッセンチョでレスリングを行うようにしたのも、「現代と古代の調和」を図るために考え出されたものでした。男子体操では、日本チームが団体総合の金メダルを獲得し、次回の東京大会へ期待が寄せられました。大会の最大の話題といえば、最終日に行われたマラソンの出来事で、はだしでアッピア街道を走りコンスタンチヌスの凱旋門にゴールしたエチオピアのアベベの優勝でしょう。

第 20 回 ミュンヘン大会 (1972 年 8 月 26 日 ~ 9 月 11 日)

ドイツ連邦共和国(西ドイツ)南部、バイエルン州都の古都ミュンヘンでは、大会都市に立候補する時に、国民から賛否両論が持ち上がりました。市当局は、都市計画をはかりたいと思っていたのですが、一方では 12 世紀初頭から残っている中世都市としての遺産が大幅に破壊される恐れもあり、これに反対する動きもありました。このため、ベルリンで開催してはどうかという声もあったのですが、戦後東西に二分された都市であるため政治的な面で懸念され、その地名からも 1936 年の“ナチスのオリンピック”という暗いイメージがつきまとい、それを払拭するためにも南部のミュンヘンに白羽の矢が立ちました。組織委員会は、久しぶりにドイツで開かれるオリンピックの成功を祈念し「明るく、整然とした大会」をスローガンにしましたが、大会後半の 9 月 5 日の早朝、パレスチナ・ゲリラ 5 人が選手村のイスラエル選手団宿舎に侵入し、2 人を射殺し 9 人を人質にして、イスラエルの刑務所に拘留中の 256 人の即時開放を要求する事態になりました。「オリンピックがテロリストたちの犯罪によって中止されることがあってはならない」とブランデー IOC 会長が語り、大会は継続されました。

第 25 回 バルセロナ大会 (1992 年 7 月 25 日 ~ 8 月 9 日)

スペイン第二の都市、人口 170 万人の地中海に面する古都バルセロナは、IOC 会長の故郷で 50 年ぶりに実現することになり、前回のソウル大会よりも、2 競技 20 種目も多く実施されました。前回の開催地ロサンゼルスは、国から補助金を受けずに完全な民間資本の導入によって運営したのにもかかわらず、最終的に黒字決算をしたことで「オリンピックは経済効果があるもの」という印象を世界中に与えたことで、サマランチ IOC 会長の出身地で行われるバルセロナは、商業主義をどれほど取り入れようとしているかに注目が集まりました。東西冷戦の終結もあり、史上最大規模の平和の祭典は、6 万 5000 人の聴衆が見守る中、モンジュイックの丘のオリンピック・スタジアムで華々しく幕を開けました。

< 現代のオリンピック >

メディアの変遷

1896 年に開催された第 1 回アテネ大会の競技種目数は 43 種目、参加国は 13 カ国、選手数は 280 名というものでしたが、その百年後に開かれた 2000 年の第 27 回シドニー大会は、300 種目、200 カ国、11,804 名の大きな大会になりました。

回を重ねる毎に大規模になるオリンピックの観戦のあり方も変わってきています。黎明期には競技場だけでしか観る事ができませんでしたが、科学技術、放送技術の発展とともに観戦する人の数もまた増えていきました。第二次世界大戦以前はラジオ、そしてヒトラーが用いた映画などが主流でしたが、戦後大きく一変しました。大戦後間もない 1948 年の第 14 回ロンドン大会では英国の B B C によりテレビ放映がなされ、競技場にいらなくても競技を観戦する事ができるようになったのです。第 17 回ローマ大会ではビデオが導入され、録画映像によるテレビ放映が可能になりました。第 18 回東京大会からは衛星放送が可能になり、全世界の人々が同時に観戦できるようになりました。カラー化、高画質化などテレビ放送技術が進化している一方で、2000 年のシドニー大会ではインターネットでの画像配信が検討されました。ただ、テレビ放映権と競合してしまうため、画像配信が実現に至る事はありませんでした。

民間資本の導入

オリンピックはアマチュアの祭典として美化されてきた側面を持っていますが、運営には資金が必要とされ、オイル・ショックがあった 1976 年第 21 回モントリオール大会では大きな赤字を出してしまいました。運営が困難になるについて民間資本の導入を主張するサマランチが 1980 年に国際オリンピック会長に就任して事態は変貌しました。

1984 年の第 23 回ロサンゼルス大会ではテレビ放映権料、企業から公式スポンサー料により莫大な運営費が確保され、大会運営の黒字化がもたらされました。このことは

逆にオリンピックの商業主義化を招いたと批判をあげ、誘致にからむ接待などの新しい問題をオリンピックに生む事になりました。誘致問題は国威の発揚、経済効果をねらう国家、企業が見え隠れしており、オリンピックは、単なるスポーツでなく、政治、経済を巻き込むゲームとも言えるでしょう。

EU諸国とオリンピック

EUの歴史は1958年に設立されたEEC（欧州経済共同体）を元とし、石炭鉄鋼共同体・原子力共同体と統一して1967年に生まれたEC（欧州共同体）に遡ります。EC発足当初はベルギー・ドイツ・フランス・イタリア・ルクセンブルグ・オランダの6ヶ国でスタートしましたが、今年EUには新たにチェコ・エストニア・キプロス・ラトヴィア・リトアニア・ハンガリー・マルタ・ポーランド・スロヴェニア・スロヴァキアの東欧諸国が加盟して25カ国に拡大しています。

とにかくオリンピックでは、アメリカやロシアなど大国の選手に注目が集まるものですが、こうした拡大EUに加盟した小国の選手の活躍を見るのも楽しみの一つです。ナショナリズムを押さえて共同目標に向かうEU諸国が参加する一方、ナショナリズムを基盤の一つともしているオリンピック大会は、2004年8月にEU加盟国であるギリシャ、アテネで開催されます。戦後、EU加盟国で開催されたオリンピックは1960年のローマ大会、1972年のミュンヘン大会、そして1992年のバルセロナ大会です。